



街

History in this town の生い立ち

織物は今、八王子の伝統工芸として守られているが、
長きにわたり街の発展に大きな役割を果たしてきた。

八王子が江戸時代に宿場町として大いに栄えたことはすでに触れたが、もうひとつ街の発展を語るうえで欠かせないのが織物業。もともと多摩地域では農家の副業として細々と養蚕、製糸などが行われていたが、江戸時代末期の横浜開港をきっかけに、八王子はその地の利から生糸の集積地となった。さらに海外への輸出用の生

糸の増加とともに、街はいつそののにぎわいをみせた。

その後、織機の機械化が進むとともに織物業はさらに発展。大正時代には八王子は織物の街として全国的に知られるようになる。第二次世界大戦のため、一時途絶えたが、昭和20年代半ばには完全復活。その象徴ともいえるのが、昭和35年に八王子駅北口のロータリーに

建てられた「織物の八王子」タワー。だが、昭和40年代以降、織物業は急速に縮小。ネクタイやショールの生産へとシフトし、タワーも駅前北口再開発のため平成9年に撤去された。

タワー同様に、昭和の八王子のシンボルだったものに、まるき百貨店（昭和35開業、同43年閉店）とイノウエ百貨店（昭和38年開業、同46年閉店）がある。少し年配の方であれば、このふたつの百貨店の屋上遊園地で遊んだ思い出を持っている人たちも多いはず。

そしてもうひとつ、八王子の名物イベントだったのが毎週日曜に甲州街道の横山町と追分町間で行われていた歩行者天国だ。昭和47年に始まり、車道にバラソルとテーブルを並べ、くつろぐ人々が多くみられた。しかしこれも交通量の増大のため、昭和52年11月を最後に見る事ができなくなった。

昭和から平成に入り、八王子駅北口から始まった再開発は平成22年、南口側の完成で完了した。駅周辺の変化は、周囲の商店街などにも活気をもたらし、今も街づくりのさなかにある。